言語

中井正一

三

ブチアーは「希臘天才の諸相」に於いて「話されたる言葉」から「書かれた言葉」への過渡は、「書かれた言葉」から「印刷された頁」への過渡よりも、想像力にとつて一層驚くべきことであり、その結果に於いて一層革命的であつたとのべてゐる。希臘人にとつて書くことは野蠻人(バルバロイ)の仕事であり、ボイニケー人の傳へたる「ボイニケーの符徴」であつた。記憶の助けとするためには、凡ての法律がそうであつた樣に、寧ろ歌ふといふ風習によつてなされたと云ふ。

プラトンはその「パェドルス」に於いて、「書かれたるものは正しくその影と呼ばれてよい所の、生にも魂にも充された談話」(二七六A)と叙べ、更に又「書かれた言説には一つの不便がある。それは實に繪畫にも附隨してゐることである。畫家の創つたものは生きた樣な態度をしてゐる、しかも君がそれに問をかけてもそれ等は嚴肅な沈默を守つたまゝでゐる。書かれた言説についても同一の事が云へやう。君はそれらがその云つてゐることの意味について或智慧を持つてゐると考へるかも知れぬ。しかし君が何かを知らうとしてそれ等の一つに問をかけても、それ等は同じ變りない答をするのみである。」(二七D)と「書かれたる言葉」への輕蔑を示してゐる。又プロタゴラス(三二九A)

に於いては準備せられたる演說を評してそれ等は書物の樣に拙惡であると云ひ、それは涯しなく進んで思想の交換を奮ひ立てない。それらは疑問を問ひも答へもしない。それ等は一度たゝかれると手をその上に置くまでいつまでも響いてゐる靑銅の壺或は鍋にすぎない。彼にとつて眞理は常に新しい形を取るプロテウス、只熟練と忍耐をもつて、辨證（ディアレクティク）の烈しい取組みによつて、論議の奪奪によつて、奪取せられねばならないものであつた。ブチアーによれば彼等は「合理的思想」としてのロゴスの働きを「合理的言說（スピーチ）」としてのロゴスの使用と不可分であると考へ、知識の材料の上に形成的に働く心の働きは、二つの人格的な智慧の衝突なくしては、卽心に對する心の働きかけ、問と答の交換、會話による思想交易なくしては、殆んど充分に腕をふるふ事が出來ぬと考へた、彼等は寧ろ聲高く考へつゝあつた。それは論敵と討論する樣にそれ自身と討論してゐる、そして一度明白に言葉として發音するや否や、それは辨證的な理路を潑溂とした戲曲的形式をもつて我々の前に置く。かくして哲學は常に戲曲的對話の內に自らを形造つたのである。(C)

正しく希臘の當時の狀態は滂湃たる辯論の流の中に棹してゐたが樣である、ホーマーの詩のオディシウス、アキレスの雄辯は問はずとするもソロン、ペイシストラトス、クレイステネス等の雄辯者より始めてアテネに共和政體が確立された紀元前五一〇年頃よりペロポネソス戰爭が始まるまではテミストクレスとペリクレスを生んだ盛んなる辯論がかの都に起つた樣である、又一方シシリーに於いてもその共和政體が確立さるゝとともにコラックス、ティシアス等の雄辯者があらはれるとともに單に語るのみならずそれを修辭學にまでもたら

した樣である。それをゴルギアスはアテネに傳へてその好奇に投じた。彼の最もすぐれたる弟子として私達は全希臘をその流風をもつて覆ふたイソクラテスをもつ。アリストテレスは彼の始めのアテネ滯在の期間(三六七年—三四七年)の恐らく後期を彼と交渉を持つたらしく殊にフィリップとアレキサンダーに關係をもつアリストテレスはマケドニアへの反對者であるイソクラテスに對して快からざる處がありしが如く、彼の修辭學に對立して「沈默するにしのびず」として彼は彼のレトリィクを草したと云はれる、そしてプラトンでは未だディアレクティクとレトリィクの對立は一方が、「全ての科學の冠石である」(共和國五三四)に對して他は「政治學の一部の影」(ゴルギア四六二)であるにすぎなかつたに反してアリストテレスではレトリィクとディアレクティクの對立は二對の合唱隊のそれの樣に相對者と成つた。(レトリィク一、三五四、a)(一、三五五b)このアリストテレスのレトリィクとディアレクティクの意味の研究はその詩論の研究と相俟つて殊に言葉と思惟の問題並に詩の意味について興味ある結果を導いて私達に敎ふるもの多大であるが樣である。人間の精神は四十九歲が一番盛りであるとアリストテレスはそのレトリィク(一、三九〇b)にのべてゐるけれども、彼がそのレトリィクを書いたのが實に四十八の歲であつたと傳へられる事は皮肉である。とまれ、彼が豐かなる精神力をもつて、一方一世に名を覆ふてゐるイソクラテスに抑へがたき憤慢を感じながら、滿ちあふるゝ雄辯の潮に向つてその學術的理路を與へんとして筆をとつたこの書は言葉の歷史にとつて瞰過されがたきものをもつてゐる。

修辭學とは彼にとつて一つの主題の證明にあたつて、それを了解せしめるために有效なる手段を

あらゆる場合に於いて明瞭にする學である。彼はその學を二つの領域卽非技巧的と技巧的に分つて前者を討論的、法廷的、顯彰的の三とし後者を道德的、感情的、論理的に分つて、道德的意識に訴へて他を說服する場合、及感情をもつてする場合論理をもつてする場合を區別する。その最後のものが主として今私達の問題と成るのである。

彼はレトリィクの世界にはそれ自身の演繹と歸納をもつてゐるとして前者卽修辭的三段論法に用ひられるものを名づけて推論 ενθύμημα とし、後者卽修辭的歸納法に用ひられるものを名づけて實例 παραδειγματα（レトリィク一、三五六b）とする。そしてそれが一般であれ特殊であれ三段論法である限りそれはディアレクティクの管掌の下にそれは進められる、その意味に於いてディアレクティクの熟達者こそ又レトリィクの達者と成り得ると彼は云ふ、（一、三五五a）グロートは(二)ソクラテス、プラトン。アリストテレスへの推移について一つの興味ある對立をなさしめて、ソクラテスとプラトンの二人の間にディアレクティクとレトリィクの二つの對立を見ると云ふ、卽一方は選ばれたる少數の人に向つて短い問答の形式をもつてロゴスを追はしめたるに反しては他は雜多なる人々に向つて長い連續したる說話をもつて—しかも彼自身それを輕蔑してゐたにもかゝはらず（パェドルス二七六、A）（書簡二、七）—人々を導かんとしたと云ふ。そして彼はこの一者を過去に他者を眼前に見たアリストテレスの位置とその叙述を意味深いとしてゐる。この考へ方の正否はともあれ、ディアレクティクは卽當時少數の人々と問と答の形式で思惟を進めし一つの技術であり、他は一般民衆に向つて命題の說伏に利用せられた他の技術であり、ソクラテスはその前者のみをもつて、プラトンは前者を尊びながら後者をも

つて、アリストテレスに至つてはその兩者を二對の思惟の合唱者と成したかの樣である。そこにかの「ポイニケーの符徵」が思惟の領域の變樣を要求しつゝありし當時の有樣を想像することが出來るであらう。卽言葉のソクラテスより文字のプラトンに移る中間態に「問答」より變樣せし「說話」をもつたと考へることが出來るであらう。問答卽言ふことゝ聽くことの世界は二つの心の間に於ける思惟の交易であるに反して、說話は一つの心の自己生產であり又自己消費である。ソクラテスの「言葉」を「書き寫した」プラトンの仕事は言葉をソクラテスに借りたる自らに問ひ自らに答へた自己反芻の苦がい記錄ではあるまいか。そこに他に談られたる外なる言葉と、自らに語りかける內なる言葉のよき對立を見るが樣である。アリストテレスはその二つのものを思惟なる頌歌の二つの合唱者、ἀντίστροφα としたとも云へるであらう。

リュケイオンに於いてアリストテレスは選ばれたる弟子と共にその午前中を「散步上の會話」περιπατοσ に費やし、午後は一般の人々に向つて比較的平易なる講述をなしたと云ふ、こうした自然的條件がプラトンのそれと異らしめてディアレクティクとレトリイクを雙關者とせしめし理由ともなり、そしてそれが又師の用ひし對話體より脫せしめて「一種の新しい文學的會話、卽科學として辯論的な對話の創造者」たらしめたとも云へやう。彼に於いて一般に信ぜらるゝ處によれば一方共同的論題に向つて、卽定まれる眞理より出發するのではなしに、權威の對立、議論の阻隔のもとに肯定も直ちに他の否定を待ち常に相對的であつて或場合は眞理と成り或場合は虛僞と成るところの相互檢討の中に滲み出づるところの思惟と、他方「科學」或は「敎育」に於ける如き不滅なる形相、一般的眞理、卽恰もすでに把握されたるもの

praecognita より出發して特殊を一般化し、感覺的誤謬を精密なる論證によつて科學的證明にもたらす仕方とに分つたと考へられる。

彼の著書の中で多くの研究者をして論爭を卷き起さしめてゐる ἐξωτερικοὶ λόγοι (exoteric discourses) もこのことを問題としながら對するとき興味多きものがあるであらう。

この言葉はアリストテレスがその著書の數所で用ゐた言葉であり、それが何を指したかはシセロが問題とせしより以來未だ論爭の中にあるけれども、大體哲學的論證に對立する常識的辨證であることに一致してはゐる。(三) シセロ及びバーネー等によりてはそれはアリストテレスの著書の二つの分類中の一つである——殊にバーネーに於いては後者をアリストテレスの失はれたる著書である——と考へる說に對して、ツェラー等はそれは洗練されたる一般人の會話或は質疑をアリストテレスがかく呼んだのであつて、著書の一部を指したものではないと主張してゐる。これ等に對し更にグロートは或場合は洗練されたる一般人との問答でもあり、又或場合はアリストテレスが問題の吟味に於いて自己自身に提出した問と答でもあらうけれども、しかしそれが論證的解釋に先だつところの問題の提出に於いてあらゆる思考の可能性を示してまづそれを紛糾せしめる仕方であることに於いて一致すると觀察して、フィジカに於けるアリストテレスの示せる例について極めて親切なる叙述をなしてゐる。(四) この最後の考へ方はそれが正否は專門家の論證に讓るとするも、語られる言葉が書れた言葉に推移する徑路に於いて、思惟が如何なる運命に置かれたかについて興味の多い問題を與へて呉れはしまいか。ディアレクティクとレトリイクを思惟の二對の合唱者であると云つたアリストテレスがその著書に於いて論證的思

惟に先だつて、exoteric discouses に當るものをもつて問題の提出者たらしめしその仕方の中には自らに語る内なる言葉と他に語りかける外なる言葉の分ち難き溶融をそこに見出さしむる。

アリストテレスのこの思惟以前の可能態 ἐνδόξα 卽ディアレクティクとレトリイクに於いて思惟のさまよふ荒れたる野はすでにロルフェスが注意せし如く (Topik. Einl.IV—VIII) 彼のトピカの思想にあらはれたる辨證的目的をもつてする議論の交はるべき場所 τοπος-sedes argumentorum に關連する。それはもと空間的にはそれを繞る物體と繞られる物體との限界を意味し、時間的に相前後する時の動きの限界とも考へられた樣であるが、トピカに於いては辨證法に於ける可能的結論の共通論題の範圍として用ひられる。問へる人の思惟せる言葉の意味より異れる如何なる意味が答へる人によつて思惟されてゐるか測難い、しかしそれが問題となる以上、そこに暗い結論、或は述語の定まらない主語を兩者の間にもつてゐると考へねばならない。その主語の廣き面を指して τοπος と彼は喚んだ樣である。問ふと云ふ判斷は—それがもし判斷と喚ばれ得るならば—考へ方によつては主語に無限に還らんとする不安なる述語をもつ判斷とも考へられやう。この意味でこの思想は私達に興味深い。

四

アリストテレスがすでに科學を一般的辨證と區別して、一般の土地に對する聖堂卽區劃されたる土地 τεμενος に譬へたと云はるゝもその語と語幹を同じくする羅典の templulus が中世の vita contemplativa 瞑想の生活の contemplativa の語源を爲すと云ふ。この語は初期キリスト敎の世界にあつては寧ろかの gnosis 神人合一の恍惚たる自然

的經驗として了解されたと考へられてゐる。(五) かの修道院生活者 ho monakhos (獨り生活する者) にとつてはそれはかのアリストテレスに於いて ergon (活動) に對立して哲學者に愛好されし skhole (閑暇) よりも遙に「人間」を離脱してゐる。アリストテレスの閑暇はむしろ靜かに選ばれたる弟子と談論すべきそれであるに反して修道院生活にとつてはそれは神の言葉を聽くべき孤獨のそれである。そこではすでに人間の問が禁ぜられ、言葉は測り難き深淵に沒して、人は人に語りかけるよりももつと多くのものを神に語りかけることゝ成つた。寧ろ神の言葉の了解のために托鉢教團 Die Bettelorden は亞刺比亞人と猶太人とを仲介としてアリストテレスを受入れたと云ふべきであらう。かの永い中世紀は羊皮紙にしるされた神の言葉の了解のために費されたる時の奢侈であつたとも云へやう。しかし又省ればそこでは寧ろ焦慮に滿ちた近代の神經の達すべきもなき心の世界の狹きしかも深き摸索が遂行されたのでもあつた。この神の言葉の了解のために用ひられしプラトンとアリストテレスの「書かれたる言葉」がやがて人間に直接に「印刷されたる言葉」として語りかける時と成つて、人はおのづから再び「人の言葉」としてプラトン及アリストテレスを了解し始むるに至つた、ワグネルの冷笑した複式簿記なるアヴエロエスよりスコトゥス、オッカムにまで至つた「二重眞理」の考へ方は——それが深遠なるものを人類の思想史上にもたらしたにもかゝはらず——この意味に於いて皮肉でもあり、又それがそれ自身崩壞の契機をもてる事を證明するかの樣である。

人が人の言葉に對立する事は云はゞ問の解放であつたとも云へるであらう。この人間の問の意識の復活が伊太利に於いてはブルーノーに於けるが

樣に活動せる自然の祕密のうちに沈潛し、獨逸に於いてはベエーメに於けるが樣に內的生活の神祕のうちに掘入つた事はすでにヴインデルバンドの指摘せるが如く興味深い事實である。そして英國に於いて、又歐洲の一般上流社會の精神生活を支配した深い懷疑的空氣に對して佛蘭西及和蘭に於いて眞面目なる學者達によつて開拓されたる數學的研究の沃野は人類の問の復活として更に深い意味をもつてはゐはしまいか。デカルトの深い懷疑よりのがれ出でる事の出來た Cogito, ergo sum の明晰にして判明なる認識はそれが神より來たものではなくして、寧ろそれによつて神の存在を證明せんとしたところの人の言葉である。自らが自らに問ふて無限なるその「事實の回答」の認識より出發したと云へるであらう。しかも彼の據らんとした數學的演繹法は「一切の學問的思考の一般的方法であり、云はゞ方法の汎神論 Ein Pantheismus der Methode である。そしてそれはデカルトから最近時に至るまで主理的哲學が終始一貫して型つた傾向である。近代哲學は一切の思想の普遍的方法を發見し得べしとの妄想に馳られて、その銳敏なる知力の限りを殆んど費ひ盡して、寧ろ弊害をかもすに至り、ヘーグルの如きは斯くの如き試みの大なるものゝ最もその極みにまで至れるものである」とヴインデルバンドは非難する。この非難は必ずしもあたらずとするもこの意味に於いてヘーグルの所謂——今日の用法の凡てがさうであるが——辨證法 Dialektik はその淵源を遠くソクラテス、プラトン、アリストテレスに持ち、華かなりし言葉の歷史を背景としながら中世の深淵に沒することによつて一方ニコラウス、クーザヌス、更にルネッサンスに於いてブルーノー、ベエーメの神祕主義を、他方デカルトよりカントへの主知主義を擔つて、浪曼主義の最後の歸結としてその

實を結んだと云ふべきであらう。

心に對する心の働きかけ、問と答の交換、會話による思想交易である處の διαλεκτική が汎論理主義の祕鑰的契機である Dialektik と成るまでには二千年の時と「言はれる言葉」より「書かれる言葉」に更に「印刷せる言葉」への言語の運命の推移と、更にヘレニックに代れるヘブライの思考法と更にそれに加はる前者の復活卽パルメニデス、ツエノー、ヘラクライトスの再生等の如きものが渾然と流れ交つてゐるであらう。しかもその結果は「外なる言葉」としてのディアレクティクの、內なる言葉」としてのディアレクティクへの轉生と云ふ興味深い現象として私達の前に提出されたのであつた。

このヘーゲルのディアレクティクに移るまでに私はまづヘーゲルの周圍を取卷いたその時代とその浪曼主義の人にについて簡單な一瞥をなして、

浪曼主義の言語に持つた關心の根源並にヘーゲルのディアレクティクの意味を顧みてみたいと思ふ。

五

一八〇〇年九月二十六日ゲッチンゲン副市長にあてゝ、ハンノーフェル大學管理部から次の如き命令書が送られてゐる。「敎授の弟、フリードリッヒ、シユレーゲルは風俗を亂す恐れある著作によつて知られたる者なるが、彼がもし暫く留るの意志をもつて市に入らんとせば、堅くそれを禁じ、ゲッチンゲンを去らんことを彼に命ずべし。」その著作とはルチンデを指し、それが原因と成つて彼がドクトル候補者としての講演に於いて學界を汚すべき程の騷動を惹起しその結果この命令書が發せらるゝに至つたのであつた。而もそのルチンデはシユライエルマッヘルの告げるところによればかのシエリングに激しい影響をあたへ、かの有名

な快樂主義的な信仰告白の詩「反抗者」を綴らしめたと云ふ。（其一節）

……

Seit ich gekommen ins Klare,
Die Materie sei das einzig Wahre.
Halte nichts vom Unsichtbaren,
Halt' mich allein am Offenbaren,
Was ich kann riechen, schmecken, fühlen,
Mit allen Sinnen drinnen wühlen,
Mein' einzig' Religion ist die,
Dass ich liebe ein schönes Knie,
Volle Brust und schlanke Hüften,
Dazu Blumen mit süssen Düften,
Aller Lust volle Nährung,
Aller Liebe süsse Gewährung,
Drum sollts eine Religion noch geben
(Ob ich g'eich kann ohne solche leben),

……

ウイルムヘルムシユレーゲルはゲーテの忠告にしたがつてこの詩を彼等の發行せる"Athenäum"に掲載することに反對した。これに對してノヴリスは抗議して「何うして「反抗者」が印刷されてならないか理解する事が出來ない。これが無神論であるの理由をもつてしてなのか、然らば「希臘の神々」（シルラー）は何うであらう。」とのべてゐる。又シユライエルマッヘルはさきのルチンデに對して世間の抱いた憤慢を指して憫むべき無知と俗人的僞善的觀念として輕蔑して「これは自分に惡意が告訴をなし敬虔なる暗愚が判決を與ふる魔法審問を想起さしめる」とのべてゐる。ヘルダーリンもかのヒユーペリオンに於いて一般に當時の社會を罵倒して「自分は獨逸人よりも支離滅裂な國民を想像することが出來ない。職人はゐるが人間がゐない。哲學者はゐるが人間がゐない。僧侶はゐるが人間がゐない。君主と奴僕、ゐるが人間がゐない。子供と大人はゐるが人間がゐない！」と云ひ、只失

はれたる希臘に對する陶醉、回復する能はざるものへの苦悶としての咏嘆を反覆する。アレキサンダー・フォン・フンボルトが彼女を見んがために十二哩を歩いたと云ふパウリーネ・ウイーゼルに對して或人は「彼女を全く希臘神話中の現象として眺める」とまで云つてゐる。新思想家としての彼女等の衣服は胸部が露出するまでに寛かに所謂因習的羞恥に對して極端にまで反抗せんと試みた。彼等が云ふ所の希臘的なるものとはかくの如き世俗の意味なき壓迫と、濕氣多き陰影への反逆、自由と光への逃避の契機として働いたと考へられる。そしてそれはシエリングのカロリーネへ、フリードリッヒ・シュレーゲルのドロテアへ、シュライエルマッヘルのグルーノウへ、ブレンタノーのメローへ等の彼等の戀の凡てが不倫の烙印を帶びて、さなきだに「小心なる羞恥をもつ世俗」をして戰慄せしめたのであつた。

當時の獨逸の全國土は三百人の君主千五百人の小侯との下に支配せられたる小聯邦の集團であつて、宮廷より家庭に至るまで社會全體が陰鬱なる專政と嚴格なる法規とが支配して、個人と天才のなすべき自由の原野が全く閉ざされて、凡ての活動は必然的に現實に對する「爭鬪」か、現實からの「逃避」かの何れかの形式によらなければならなかつた。その「逃避」は、再び發見せられたる古典藝術及びウインケルマンの事業によつて準備せられ、「爭鬪」はヤング、スターンの如き感傷的憂鬱的なる英國の詩人、及シルラーの評した樣に「人間を基督教徒から徵集せんとする」ルソーの影響によつて準備せられたとブランデスは敎えてゐる。(六)しかもその爭鬪はかのフランス革命の勃發によつて、凡ての變容の可能であることについて若い彼等を沸騰せしめる火焰と成つたのである。二十歳をすぎて間のないシエリング、ヘーゲル、ヘルダーリンがか

のオーガスチン寮で互にギリシヤへの感傷によりて結び合ひながら共に生活してゐる時、勃發せる佛蘭西革命によつて刺擊された彼等は政治的倶樂部を組織し食堂に高らかにマルセーユの進行曲を歌つて叱責を受けたと傳へられる事實は當時の若い人達のすがたを恰も象徴するかの樣である。ブランデスはフィヒテの知識學について――その半ばを信ずるとするも――しかも有益なる意見をのべてゐる「フィヒテの世界的創造的自我の說は、所謂「常識」(健全なる人間の悟性)と激烈なる戰をなした。而してこの事は浪曼主義者に取つて最もいたく喜ばれた考であつた。知識學は科學的逆說であつた、そしてこの「パラドックス」こそ彼等にとつて思想の生活の精華であつたのである。且この哲學の根本的思想は逆說的であるとともに急進的であつた。この哲學は凡ての歷史的因襲的社會制度を理想的國家に變形せしめんと試みたる佛蘭西革命の印象の下に形成せられたものであつた。かくて浪曼家はこの自我の哲學に於いて古き世界をその樞軸より引離すべき槓杆を認めたのであつた。」彼等にとつて俗人主義とは「有限」を意味し、それに對する自我の自由なる創造的想像力が卽「無限」を意味したのだとさへも彼は云ふ。ノヴリスもその青年時代の書翰に於いて「專政と牢獄とを破壞せんがための新しき聖バルトロメオの夜の虐殺」を冀ひかの「勇敢なるフィヒテは實に吾々の凡てに代つて戰つて吳れたのである」とのべてゐると云ふ。(40)

かゝる周圍の事象の下にかの反抗者の群の凡てから「言語」の研究が勃興したことは一つは「逃避」の意味に於いて失はれたる言葉、未知の土地の言葉への愛著、他方には「爭鬪」の意味に於いてその時代にすでに形而上學的宗教的に硬化したる哲學への反逆よりせられたと考へ得るであらう。ヘルデルに

於けるが樣に神より來つたとするヘブライ的言語と人間より出發する獨逸的言語を分類することより言語研究にたづさはつたもの、フンボルトの如く羅馬と希臘と獨逸の三つに分つことをもつて言語研究に入り、つひに滅びたる東方の言語の研究卽かのKawi語の廣汎な研究にまで至らしめたのはその前者であらう。そしてそれはシュタインタールが指摘せる如く言語類型(七) Sprachtypen の檢索に於いて不朽の事業をなしたとともに殊に後者はマルティ、カッシラー等によりて各々異つてゐるにしてもしかも重要なる言語哲學的發展をなさしめる淵源となる。フリードリッヒ・シュレーゲルの立場は寧ろ硬化せる哲學への反逆卽爭鬪的意味に於ける態度を持してゐた樣である。彼のドレスデンの冬の講演に於ける言語についての言說は恰もそれを露はにしてゐる。彼は「哲學の眞の方法は思惟の單純なる過程と生ける發展の上に在らねばならない」とし、そしてそれは「敎育の規準と成り人生の相談者」とならなければならない。「所謂純粹哲學とは本質的に空虛であり、活動的現實より隔離され又抽象されてゐる、終りもなく初めもなく、立脚地もなく又目的地もない。そして全き意味に於ける人生への念願について何の知ももつてゐない」と嘲笑を酬いてゐる。外なる言葉とは思惟である。ソクラテスのイロニー、プラトンのディアレクティクは卽その意味で正しき思惟のすがたと成る。そして眞のイロニーは彼にとつては無限の理念である感情卽理性と想像の永遠なる調停者であるところの「愛」のイロニーにあると彼はその講演の目標をあらかじめ立てゝゐる。そして意識の核心を眞の方法に於ける論辯的感情としてかのソクラテスのイロニーと近世的ディアレクティクとが結合さるべきことを言明してゐる。(八) この事はかの

フンボルトの內的言語形式の一つの解釋への指針を示すとも云へやう。この內的と外的の言語分類はすでにライプニッツが言語の種々なる分類の一つの中に私達の思想を記憶するために助けと成すべき自分自身に語りかける言葉と、他人に自分の思想を傳へんとするための他に語りかける言葉を區別してゐる。(九) この分ち方はかのフンボルトの外的言語を單に言語音響として實驗心理學的にのみ取扱ふ考へ方よりもかへつて興味ある樣に思はれる。ことにシュレーゲルの二つのディアレクティクの連絡を外と內の言語形式とする處の考へ方には言語をエルゴンではなくしてエネロゲイヤであると注意するフンボルトの考へ方の興味多き取扱方があり、又そこにかくの如き社會事象を背景として見たるヘーゲルの一つの見方を求めしめるものがある。

六

ヘーゲルは一七七〇年八月二十七日にシュッットガルトに官吏の息子として生れ、嚴格なプロテスタント的精神の下に育つたその家庭教育に疑惑を感じ初める頃卽彼のギムナジュムの時代よりかの少年の憧れやすき眼は希臘に轉ぜられた。そして寧ろ文學的研究ことに悲劇作家を漁つた中にもソフォクレスを彼は愛してそれを飜譯までし、アンチゴーネに深い興味をもつてゐたと云ふ。チュービンゲン大學生活に入るに至つてかのオーガスチン僧庵の寮にヘルダーリン、シエリングと共に生活した。其處では彼は希臘の研究よりも基督教的精神について關心をもち、爾後二つの精神は二つの過去れる力として彼の中に蘇り戰ひ又容融されれ始めたと云ふ。「愛もて和められたる運命」の思想は彼がこのチュビンゲンのルーテル教權に於いて得たる思想とせられてゐる。しかしこの間でもヘルダーリンと彼を結び付けたものは希臘の共通

な憧憬であつた樣である。そして興味あることにはシエリングへの結付きの原因は希臘へのそれではなくして佛蘭西革命への憧憬であつたと傳へられる。一つは「逃避」への友であり、他は「爭鬪」への友であつたのである。この革命の勃發の外の、この時代の最も大なる事件の他の一つはカントの哲學の出現であつた。彼のカントへの關心は一七九四年彼がベルンの家庭教師時代に至つて卽二十四歲頃より向けられたのであつた。其處で彼はフイヒテにも近づき、シルラーの美的教育論にも動かされたのであつた、そしてこの時代にものされたる研究は未だ宗教的のものに限られてゐた。そしてヘルデル、フンボルトに於てそれが言語に於いて爲された樣に民族的對立として彼はそれを取扱つた。不滿と欺かれたる期待と疑惑の關聯を猶太思想に見出し、反之、鐵の如く冷い必然、變へられざる運命の無言の忍從、不幸は必然の不幸であり、痛苦は必然の痛苦であると云ふ起れるものの凡てへの諦觀をして彼は希臘思想となしたのである。そして寧ろ好意を後者によせたのである。このベルン時代の後期より彼はヘルデル的汎神論への轉向を示し初めた、彼のヘルダーリンに送つた詩篇にそれが滲み出でゝゐる。。

Was mein ich nannte, schwindet.
Ich gebe mich dem Unermesslichen dahin.
Ich bin in ihm, bin Alles, bin nur Es.
Dem wiederkehrenden Gedanken fremdet,
Ihm graut vor dem Unendlichen, und staunend
fasst
Er dieses Anschauns Tiefe nicht.

われとよばむものゝ消失せて、
數へるとしもなき物ぐさに身を委ぬ、
身はかのものゝうちに、なべてに、只そのも

のにしあり、
うちめぐる思ひの及びなさ
限りなきものにうち怖れまたうたてくも
かくこゝろにくゝも見るすべもなし。（意譯）

一七九七年一月彼がフランクフルトに移るに至り、ヘルダーリンと再び交を新にしチユービンゲン時代が復活せられた感があつた。そして彼の內面に醱酵せる希臘思想と基督敎思想の混合物は神祕的汎神論としてその形を整へるに至りそこにその時代の獨逸精神の新なる形式を發見したかの樣である。そして彼のフィヒテへの傾倒はその中にすでにその萠芽を見出すを得るところのディアレクティッシュな方法の中にその展開の出發點を求めたのであつた。彼は對立そのものが常に再統一を前提するとして、對立される事によつて痛苦に陷れゝ命は必然的に再び結合さるゝべきことを前提してゐる。この再び見出されたる生命の感情が卽愛である。この愛をもつてのみ人は運命と痛苦に戲れ得ると彼は說き初める。愛は全體の感覺、Empfindung des Ganzen であり、凡ての分裂を合一する力である。„Du sollst lieben; die liebe selbst spricht kein Sollen aus; sie ist kein einer Besonderheit entgegengesetztes Allgemeines; nicht eine Einheit des Bergriffs, sondern Einigkeit des Geistes, Göttlichkeit." そしてこの汎神論的全體と部分の考へ方は時代の影響ならびに彼の內的傾向にしたがつて政治的社會的關係にまで發展した。„Bei jedem echt freien Volk ist jeder ein Teil, aber zugleich das Ganz." „jeder einzelne trägt der Ganz der states in sich. これは一八〇〇年前後の彼の思想であつた、これを期として彼は神祕的汎神論より更に汎論理主義への轉回の準備をしつゝあつた。„Die Entgegensetzung des Anschauenden und des Angeschauten, dass sie Subjekt und Objekt sind,

füllt in der Anschauung selbst weg; ihre Verschiedenheit ist nur ein Möglichkeit der Trennung; ein Mensch, der ganz in die anschauung der Sonne versuken wäre, wäre nur ein Gefühl des Lichts, ein Licht-gefühl als Wesen,"

デイルタイの注意せる如く彼(十)が希臘思想と猶太思想とを對立し、その激しき混合を彼がまのあたりに爭鬪せる時代に見出し、而も彼等がその時代の將來をしてより高い止揚あらしめんとシュライエルマッヘルと共に强く冀つてゐた心持を彼の體系の發芽の背後に理解しなければならない。

この長い準備の末に、新しき世紀の始め一八〇一年のしかも一月彼が三十歲彼は學問の自由市でありラインホールト、フイヒテ、シエリング、シルラー、シユレーゲルがその絢爛たる才氣を揮つてゐたイエナに來た。そこはゲーテの第二の故鄕であり屢々フンボルトがシルラーに會ひに來た地である。全浪漫主義者はほんの暫くではあつたが當時そこに集中して互に相應酬してゐたのである。そして彼が一八〇七年までのイエナの生活が彼の目覺しき體系の確立の時代であつたのである。一八〇七年には「現象學」一八一二年—一六年にはニユルンベルグで「論理學」一八一六—一七年ハイデルベルグで「エンチクロペディー」を彼は版にした、かくして一八一八年より彼のベルリン時代が始まる。

彼は「論理學」に於いても「現象學」に於いても悟性と理性の領域を判然と區別する、そして理性論理は悟性論理換言すれば反省的論理の上に層に順序づけられる。そして後者は彼が體系に於いては、常に何物か常住ならざる未完のものであり、理性論理によつて指導轉化されなければならず、從つて本質的に否定の徵標しかもち得ないものと成つてゐる。しかもこの反省卽悟性作用とは一般的抑

象化を意味し感覺的統覺と思惟的理性作用の中間者と成る。これが彼の絶對的否定としての創造力と成る。しかもこの否定の矛盾性は凡ての動きと生の根源と成る、

„Der Wiederspruch ist die Wurzel aller Bewegung und Lebendigkeit; nur insofern etwas in sich selbst einen Wiederspruch hat, bewegt es sich, hat Trieb und Täätigkeit. "(Logik s 58)„ Die mannigfaltigen werden erst, auf die Spitze des Wiederspruchs getrieben, regam und lebendig gegeneinander und erhalten in ihm die Negativität, welche die innewohnende Pulsation der Selbstbewegung und Lebendigkeit ist." (ibd. s. 61)

彼の現實性の概念 Der Begriff der Wirklichkeit も亦本質と存在、內なるものと外なるものゝ直接的なる統一と成る „Die Wirklichkeit ist die unmittelbar gewordene Einheit des wesens und Existenz, order des Inneren und des Äusseren. "(Entl. § 140) そしてこの現實的形成作用は客觀的精神の作用として有限なる主觀的精神と、無限なる絶對精神との辯證法的中間者と成り、現實的自由意志として働く。(E. § 481—482.) この客觀的精神はディルタイが wirkungszusammenhang として解釋せんとして興味を感じ、シュプランガーは geneinsames medium として理解したところのものである。(十二) この中間者の介在は私達に深い問題を提出する。彼の全體系はすでにライプニッツに於いてあつた同樣に遂次的段階層性をなしてゐる。(E. § 251) この段階層性と中間者の關係は今私達にライプニッツの體系と彼のそれとを興味ある對立に導くが樣である。

ライプニッツは彼のモナドロギーの六十二節に於いて、凡ての個體は全宇宙を表現するが故に嚴密なる意味に於いてその部分なる身體もそれを表

現してそれがエンテレヒーを構成する。故にすでに身體によつて萬有の組織内に於ける凡て物の關係が expreme せられて、精神は特殊なる關係をもつてそれが屬する處のその身體の中に全宇宙を represente することゝ成ると云ふ意味の事をのべてゐる。この expreme と represe nte の二語はライプニッツが常に並べて用ひた語であり、すでにクーノー・フィッシャー(上三)によつて氣付かれたる如く一つは單なる表出として用ひ、他は意識の加はれる反省的表現として用ひられた。この單なる表出とは、即ち下は物質より上は神にまで至れる二つの極をもてる表象の段階、換言すれば「暗き表象」より「明き表象」へのモナドの形而上學的一連續體系の契機である。これに反して反省的表現とは、モナドが始めて自我としてのモナドの内面に摻入して、暗き表象と明き表象とは「事實眞理」と「永遠眞理」の二つの認識論的對立の根據をなして意識 la conscience の中に働く思惟 la pensée の契機と成る、即前者は彼の Perception であり、後者が即彼の、apperception の領域である。

「モナドロギーはモナドであり得ない」とクーノーフィッシャーが巧みにも悚した樣にこの連續態的形而上學より二元的認識論への連絡はライプニッツでは殘された課題であり多くの人々によつて問題とされてゐる。

未だ意識の發育しない嬰兒の行爲を觀察してゐるとき、自らの指を動かせて如何にも不思議さうに見入つてゐる事を經驗する事があゝ。恰もそれは自らの「行爲」とその見られたる「もの」との間に意識的連絡を缺いでゐてその同時性に一種の fremd な感情を懷けるかの樣である。即見られた存在と、その中に働いてゐる自我の意識との間には一つの飛躍があると同時に放たれざる同一性があらねばならない。「中間性」のもつ非合理性にはか

くの如きものがあるとも云へやう。かの連續的層性としてのモナドの系列の一モナドとしての自我が自我そのものゝ自覺の上に立つためにはモナドの核は破られその中に深き沒入があらねばならない。そして暗きものより明きものへとしてのモナドの連續系列は、その內面に潛入することによつて寧ろ自己脫離とも云はるべき否定的二元的力としての自我の內面に働かねばならない。そして明きものは今までに明るくされたものであつて、より暗きもの、より高きものに向つてその今の立場を捨脫する處に連續性の內面に働く眞の力があることゝ成る。かくて明暗はその方向を轉ずる。この非合理的自我の創造力が他の浪曼家の目標と成つた樣にヘーゲルはこの「中間者」としての否定的根源的力としてそれを把握したのではあるまいか。そしてライプニッツで課題として殘されたるものを解かんとして試みたのではあるまいか。

Wie alles sich zum Ganzen webt,
Ein in dem andern wirkt und lebt!
Wie himmerkräfte auf und nieder steigen
Und sich die Goldnen Eimer reichen!
Mit segendustenden Schwingen
Vom himmer durch die Erde dringen,
harmonisch all' das All durchklingen!
Welch Schauspiel! aber ach! ein Schauspiel nur!
Wo fass' ich dich, unendliche Natur? (Faust)

一切が渾一體をなして、萬物が互に他の物の中に依つて生きて居り、天界の諸々の力が昇りては降り調べなして萬有の中に響き周つてゐても、それはファウストにとつて「併し嗟乎、觀物に過ぎない」涯しない自然よ、どこを執つて自分はお前を捉へやう。

Du hörest ja, von Freud' ist nicht die Rede,

Dem Taumel weih' ich mich, dem schmerzlichsten Genuss,
Verliebtem hass, erquickendem Verdruss,
Mein Bussen, der vom Wissensdrang geheilt ist,
Soll keinen Schmerzen künftig sich verschliessen,
Und was der Ganzen Menschheit zu geteilt ist,
Will ich im meinem inneren Selbst geniessen,
Mit meinem Geist das höchst' und Tiefste greifen,
Ihr Wohl und Weh auf meinen Busen häufen,
Und so mein eigen Selbst zu ihrem Selbst erweitern,
Und, wie sie selbst, am End' auch ich zerscheitern,
(Faust)

醉よろめきに身を捧げ、全人類の受くるものゝ凡てを受けその破滅とともに碎散らんとする存在そのものに一致せんとする執着が、つねにかの否定の Geist であり「混沌の生んだ奇怪な子」であるメフイストに身を委ね魔術の盃を口にするに至らしめる。

ヘーゲルもその現象學の序文に,,Das Wahre ist bachantische Taumel, an dem kein Glied nicht trunken ist; und weil er jedes, indem es sich absondert, ebenso unmittelbar auflöst,—ist er ebenso die durchsichtige und einfache Ruhe." とのべてゐる。「眞なるものはバツカスの陶醉である」と云ふ彼の心持は寧ろ彼の體系の何處の隅々にまでも滲み透つてゐたものではあるまいか。人々が只それを見るだけで決して入つて行かうとはしなかつた處の彼の壯麗なる思惟の建築の內部にはかへつて祕かにもかくの如きバツカスの饗宴が開かれてゐたのではあるまいか。

一八二〇年の或日彼は親しき友の團欒に於てシャンペンの杯をあげて「この日の追憶のためにこの盃を干そう」と提議する。その集りの誰もが、この日の意味を記憶するものがない。ヘーゲルは一段聲を高めて「この杯を一七八九年七月十四日バスチーユの襲撃の日のために」と彼は杯を口にした。單にそれをその場の座興とするには彼は餘りに老いてゐる。一八二〇年それは彼の五十歳の夏である。一八二七年十月十八日にはヘーゲルはゲーテにまねかれてゐる。その席上にはツェルテル及ハーマンもゐた。そしてゆくりなくも話題は辨證法の本質に移つた。ヘーゲルは云ふ、「それは整理され方法的に訓練された反抗的精神にすぎない、この精神は誰にもあるが、その能力は眞僞の區別に際して偉大さを現はすものである。」「たゞ」ゲーテは言葉を入れる「さう云ふ精神的技倆と才幹とが僞を眞とし、眞を僞とするために往々にして濫用されなければいゝが。」「さう云ふ事はありませう、然しそれは精神の病的な人達に限ります」とヘーゲルは答へてゐる。それは彼が死の四年前である。青年客氣の消へし日尙彼は彼の事業の回想にあたつて、その總決算をもつて「訓練された反抗的精神」と呼んだ事は寧ろ荒々しき老年を想はしめるものがあるではないか。

彼のイエナの事業を理解するためには彼のシュツツトガルト、チユービンゲン、更にフランクフルトを回想しなければならないと思ふ。そしてイエナに集まれる多くの浪漫家を顧ねばならないと思ふ。そしてそこに初めて彼の所謂「否定的精神」の意味が了解できるのではあるまいか。彼の汎論理主義の內面にはざはめける社會と佛蘭西革命の刺擊によつていらだてる反抗者の群の聲高き論爭の雜音が響いてはゐないであらうか。彼の「內なる言葉」としてのディアレクティクの底にはかの

ダントンの「外なる唇」の影がないであらうか。かのプラトンの稱する常に新なる形をとるプロチユース卽その意味に於けるディアレクティクがその似たる姿を潛めてゐないであらうか。

かくして問答の形式をその始源とするディアレクティクが汎論理主義的形式をもつてする現今の意味に於けるディアレクティクに轉じたるその運命はあたかも「言はれたる言葉」より「書かれたる言葉」更に「印刷されたる言葉」に移行つた言葉のもつた運命に似通つてゐる。書かれたる言葉、卽問ひも答へもしない「靑銅の壺」の如き固き言葉はすでに暗き自我に問ひ、自我の更に答ふる限りなき問のそれであり得る。「咨問」より「疑惑」に轉ずる言葉の運命の根柢には又更にその底に横たはる „Frage" に根ざすものがあると云へよう。

ヘーゲルの面した「時」のすがた、人の歷史の見出さずにはゐられなかつた自らの內部に於ける

Fremd なるもの、對立、更にそのよりよき融合の願。それらの分裂せる社會が萠んだ分裂せる自我、自己の內部の對話者、戲曲に於ける如き諸性格の各々の固執せる意見、ラザルスが云へる如く「それは Nicht-Ich と云はんよりも寧ろ Viel-Ich である」(十四)而もその根柢に不變にあるものは「反抗的精神」換言すれば自ら自らの足下をも省み、搖ぎ滑り、脫けて行く底のものである。

かくして扉の小さき覗穴よりのぞく看守の眼を見上げた時獄裡の囚人が感ずる樣な恐ろしい感情を、われと自らの眼に感ずる處の「見る」ことのもつ內面化卽ち「批判」の意味、かくの如きものが「言ふ」ことの中に働き初めるのではあるまいか。「ある晴かなる日哀れなる囚人が、自分の仕事から覗穴を見上げて、そこに眼の消へ失せたのを認める、そこで初めて呼吸し得る、生き得る。」(十五)丁度それの樣に、人は內につぶやく言葉、卽涯しない自

らが自らの問ふ執拗なる Frage を逃れんとして無限に假面を覆らなくてはならないのではあるまいか。そしてそれがあたかもそれを逃れ得るけれども、しかし又、かへつてもつと深い苦しみをも與へるところの「詩」の領域への一つの出發點ともなり得るのではあるまいか。(未完)

註

(一) S. H. Butcher, Some Aspects of the Greek Genius. (希臘天才の諸相、田中和辻兩氏譯)
(二) Grote. Aristoteles, I. p. 380.
(三) 〃 〃 .
(四) 〃 I. p. 75.
(五) 思想、第三十九號一八三頁參照
(六) G. Brandes. Die Literatur des 19. Jahlh. ini. Hauptströmungen. Bd II. (吹田順助氏譯)
(七) Steinthal. Kleine Schriften. s, 274
(八) F. v. Schlegel. Philophy of language. p. 354—364.
(九) Leibniz. New. E. c. Human Understanding. tr. b. Langley II. 369—370.
(十) W. Dilthey' G. S. B II. s 152
(十一) Dilthey. D. aufbau d. geschichtlichen W. i, d. Gw. s. 83 ff.
(十二) H. Wenke. Hegels Theorie des objektiven G. s. 122
(十三) Kuno Fischer. Leibniz. s 405—426.
(十四) Lazarus. Geist. u. Sprach s. 343.

彙報

昭和二年度卒業論文題目

○印選科生

○哲學專攻

ドロイセンの「歴史學綱要」について　望月參伍
カントに於ける主觀的普遍に就きて　石川潜神
アウグスチーヌスの Distentio Animi としての時間に就いて　服部英次郎
自我の問題　芳岡良音
フイヒテの「知識學」に於ける「實踐的自我」について　竹内雪英
ベルグソンの時間　西村嘉三郎
デイルタイに於ける認識的についての一考察　富岡益五郎
シヨーリングの「自由意志論」と宗教的自由　大槻周吉
表現と理解　加藤清則
物自體ト意識一般　吉田竹一